

『太平經鈔』卷三(二十二葉表一行)〜二十三葉表六行)

金志珉(ソウル大)

〔原文〕

師策文…師曰、吾字十一〔明爲止〕(一)、丙午丁巳爲祖始、四口治事萬物理、子巾用角活其右、潛龍勿用坎(二)爲紀、人得見之壽長久、居(治)〔天地間活〕(三)而已。治百萬人仙可待、善治病者勿欺殆、樂乎長安市、使人壽若西王母、比若四時周反始、九十字策傳方士。

真人請問神人、前所賜不達之生策書九十字、未知趨向義理所歸、願爲一一解、以遺後世、貫結而不忘。神人言、爲子直解之。

〔校勘〕經…『太平經』卷三十九解師策書訣第五十

(一) 吾字十一…經・後文皆作「吾字十一明爲止」、從此改之。

(二) 坎…經作「欲」。

(三) 治…經作「天地間活」、從此改之。

〔訓讀〕

師策文…師曰わく、吾が字十一明を止と爲し、丙午丁巳もて祖始を爲め、四口もて事を治むれば萬物理まり、子の中を角に用いて其の右を活かす。潛龍用いる勿く坎を紀と爲し、人之を見るを得れば壽は長久たり、天地の間に居り活くるのみ。百萬人を治めて仙待つべく、善く病を治す者は欺殆するなく、長安の市に楽しみ、人の壽をして西王母の若くせしめ、例えば四時の周くして始めに反るが若く、九十字の策をば方士に傳う。

真人神人に請問す。前に不達の生に賜うる所の策書九十字、未だ趨向・義理の歸する所を知らず、願わくは一一解を爲し、以て後世に遺り、貫結して忘れざらんことを。神人言う、子の爲に直だちに之を解せん。

〔譯〕

師策文…(皇天の神人である)師はいった。私の(策文の)字は「十一」に「明」を「止」とし(赤氣でなりたち)、丙午と丁巳の赤氣をもちいて始祖たる根源のために修行し、「四口」つまり「言」をとなえる修行をおさめれば萬物が治まり、子の中を角に用いて(字の)右におく「誦」の字を心得る(誦讀する)。用いることのない潛龍(甲)と坎(子)を紀とし(甲子の日に期し)、帝王のように悟った人がこれを見ることができれば壽命は永遠となり、天地の間に居て(この道を修めながら)生きていくのみである。百萬人の生命をすくっては仙人となることを待ち、病氣を治すことにすぐれたものは偽り欺くことはなく、永遠なる安樂の場に生を樂しみ、人々の壽命を西王母のように長生きさせ、四季がめぐってまた始めにもどるように途絶えることがない。これら九十字の策文を方士に傳える。

真人は神人に問うていった。先ほど不肖の小生に賜わった策書九十一字については、まだその目的と意味を理解しておりません。一字一字解説をしていただければ、それを後世におくり、心にとどめて忘れないようにすることを願います。神人がいった。そなたのためにただちに解説して

あげよう。

〔語注〕

○師 『太平經』卷三十九「師者、正謂皇天神人師也」。

○十一明爲止 『太平經』卷三十九「十一者、士也。明爲止者、赤也。言赤氣得此、當復更盛王大明也」。

○丙午丁巳 『太平經』卷三十九「丙午丁巳、火也、赤也。丙午者、純陽也、丁巳者、純陰也」。

○祖始 『太平經』卷十五「夫天地人本同一元氣、分爲三體、各有自祖始」。『太平經』卷三十九「爲者、爲利帝王、除凶害出也。祖者、先也、象三皇德也。始者、反本初也。故行是道、當得反上皇也。」

○四口 『太平經』卷三十九「四而得口者、言也。能日習言吾書者、即得天正經字也」。

○子巾用角 『太平經』卷三十九「誦字也。言誦讀此書而不止」。

○潛龍勿用 『周易』卷一（八上）乾「初九、潛龍勿用」。疏「龍者、變化之物。言天之自然之氣、起於建子之月、陰氣始盛、陽氣潛在地下。故言初九潛龍也。此自然之象、聖人作法言、於此潛龍之時、小人道盛、聖人雖有龍德、於此時、唯宜潛藏勿可施用、故言勿用」。

○人得見之 『太平經』卷三十九「人者、正謂帝王一人也、上德易覺知行道書之人也」。

○長久 『老子』第七章「天長地久。天地所以能長且久者、以其不自生、故能長生」。

○治百萬人 『太平經』卷三十九「治者、正也。天以此書正衆賢之心、各自治病、守真去邪。……治眞道者、活人法也、故言仙可待也」。

○欺殆 『太平經』卷四「人民更相殘賊、君臣更相欺殆」。『老子指歸』民不畏威篇「忠信所愛、欺殆父母、侵凌天地」。

○長安市 『太平經』卷三十九「長者、行此道者、其德善長無窮已也。安者、不復危亡也。得行此道者、承負天地之謫悉去、迺長安曠曠恢恢、無復憂也。市者、天下所以共致聚人處也。行此書者、言國民大興云云、比若都市中人也。」

○西王母 『山海經』西山經「玉山、是西王母所居也。西王母、其狀如人、豹尾虎齒而善嘯、蓬髮戴勝、是司天之厲及五殘」。大荒山經「昆侖之丘……有人、戴勝、虎齒、有豹尾、穴處、名曰西王母」。『淮南子』覽冥篇「羿請不死之藥於西王母」。『太平經』卷三十九「西者、人人棲存眞道於胸心也。王者、謂帝王得案行天道者大興而王也、其治善迺無上也。母者、老壽之證也、神之長也。」

○四時周反始 『禮記』孔子閑居（八六二上）「天有四時、春夏秋冬」。『禮記』郊特牲（五〇〇上）「萬物本乎天、人本乎祖、此所以配上帝也。郊之祭也、大報本反始也」。『禮記』祭義（八一三上）

「天下之禮、致反始也」。『太平經』卷五十「吾道即甲子乙丑六甲相承受、五行轉相從、四時周反始」。

○方士 『史記』封禪書「騶衍以陰陽主運顯於諸侯、而燕齊海上之方士傳其術不能通」。

○九十字 「師曰」より「方士」までの九十一文字のことを指す。

○不達之生 『尚書』周書・泰誓（三一五下）「人之彥聖、而違之俾不達。是不能容」。『太平經』卷三十九「天師前所與愚昧不達之生策書」。

○趨向義理 『抱朴子內篇』遐覽「或曰……又有損於精思、無益於年命、……以尋生道、倉卒罔極、無所趨向」。鳩摩羅什譯『仁王般若經』（大八、八二八中）「受持讀誦、解其義理」。〔五世紀頃〕

司馬相如「上林賦」(文選八)「覽觀春秋之林」如淳注(三世紀頃)「春秋義理繁茂」。

○貫結 『周禮』夏官司馬・弁師(四八三上)「王之皮弁、會五采玉璫」。鄭玄注「璫讀如綦、車轂之綦。……綦、結也。皮弁之縫中、每貫結五采玉十二以爲飾、謂之綦會」。

○直解 梁・元帝「洞林序」(藝文類聚七十五・卜筮)「山陽王氏、直解談玄」。

〔原文〕

師曰、吾字十一明爲〈正〉(一)。「師」者、正謂皇天神人師也。「曰」者、辭也。吾乃[※]正(二)辭於天、親見遣而下、爲帝王萬民具陳、解億萬世諸承負之譴也。「吾」者、我也、即天所急使神人也。今天以是承負之灾四流、始有根本、後理(三)者、悉皆隨之失其政、無從得中斷止之、更相賊傷、爲害甚深、今天以爲重憂。「字」者、言今陳列天書、累積之字也。「十」者、書與天真誠信洞相應、十十不誤、無一欺者也。得而衆賢者(四)自深計、其先人皆有承負也。謂(五)之不止、承負之厄、小大悉且除矣。

〔校勘〕

※ 乃…經作「廼」、以下皆同。

(一) 正…經作「止」、從此改之。

(二) 正…經作「上」。

(三) 理…經作「治」。

(四) 者…經無此字。

(五) 謂…經作「誦」、勝於意。

〔訓讀〕

「師曰わく、吾が字十一明を止と爲す」。「師」とは、正に皇天の神人の師を謂うなり。「曰」とは、辭なり。吾乃ち正に天に辭すれば、親しく見遣して下り、帝王・萬民の爲に具陳し、億萬世の諸の承負の譴を解くなり。「吾」とは、我なり、即ち天の急ぎて使わす所の神人なり。今天以えらく是れ承負の灾い四流するは、始に根本有るも、後に理むる者、悉く皆な之に隨いて其の政を失い、中斷して之を止むこと得るに従る無く、更に相い賊傷し、害を爲すこと甚はだ深し、と。今天以て重憂と爲す。「字」とは、今ま陳列する天書、累積の字を言うなり。「十」とは、書 天真の誠信と洞く相い應じ、十の十誤らず、一欺無きものなり。得て衆賢なる者、自から深く計り、其の先人皆な承負有るなり。之を謂えて止まざれば、承負の厄、小大なるも悉く且に除からんとす。

〔譯〕

「師がいった、吾が字十一明を止と爲す」の句において、「師」とは、皇天の神人である師をいう。「曰」とは、辭(ことば)である。「吾」が皇天に祝辭をあげたので、(皇天より)親しく派遣されて下界に降り、帝王と萬民のために詳細に陳べ、億萬世代の承負の罪を解除してくれるのである。「吾」とは、私のこと、つまり天が緊急に送った神人のことである。いま皇天は、承負の災禍が四方に蔓延していることについて、始めにその原因があるが、後にこれを治めるものが、すべて(承負の罪)にしたがって失政し、それを絶ちきり終わらせるすべがなく、さらに互いに傷つ

け、書しあうことが深刻となったと考えている。いま皇天はこれを重大な憂慮としている。「字」とは、いま陳べた天書のこと、(氣を)積み重ねてなりたつた文字である。「十」とは、天書(の文字)と(修道士の)天眞のまごころとが、あますところなく相い應じ、十のうち十すべてが誤ることなく、一つの偽りもないことをいう。(天書を)得たら賢明な人々は、自ら深く考えて自分の祖先にみな承負の罪があることを理解する。この九十一字をとなえてやまざれば、承負の厄は、大小なくすべてが取り除かれる。

〔語注〕

○皇天神人 『太平經』卷四十四「明師皇天神人」※太平經の神格『太平經』卷四十二「無形委氣之神人(元氣)」「大神人(天)」「真人(地)」「仙人(四時)・大道人(五行)・聖人(陰陽)・賢人(文書)」「凡民(草木五穀)」「奴婢(財貨)」

○見遣 『太平經』卷四十一「今吾迺見遣於天下、爲大道德之君、解其承負」。『春秋左氏傳』昭公傳十三年(八一四下)「惠伯待禮」杜預注「欲得盟會見遣、不欲私去。……待見遣之禮」。

○承負 『太平經』卷二解承負訣「力行善反得惡者、是承負先人之過、流災前後積、來害此人也。其行惡反得善者、是先人深有積畜大功、來流及此人也」。

○四流 『管子』輕重「昔者紀氏之國、強本節用者、其五穀豐滿而不能理也、四流而歸於天下」。

○無從 『太平經』「仁人失之無從爲賢」卷九十三「無從得知之」。※『毛詩』唐風·采芣「人之爲言、苟亦無從(したがう)」。

○中斷 『楚辭』嚴忌·哀時命「弱水汨其爲難兮、路中斷而不通」。

○賊傷 『墨子』號令「詐爲自賊傷以辟事者、族之」。

○重憂 『後漢書』吳蓋陳臧列傳第八「東州新平、大將軍之功也。負海猾夏、盜賊之處、國家以爲重憂、且勉鎮撫之」。『太平經』卷六十七「小人無道多自輕、共作反逆、犯天文地理、起爲盜賊相賊傷、犯王法、爲君子重憂」。

○天書 『太平經』卷三十九「迺謂上皇天書、下爲德君出眞經」。天文記訣「天地有常法、不失銖分也。遠近悉以同象、氣類相應、萬不失一。名爲天文記、名曰天書」。※『洞玄諸天內音經』(無上秘要卷二十四)「天真皇人曰、天書玉字、凝飛玄之炁、以成靈文、合八會以成音、和五合而成章」。

『隋書』經籍志「(元始天尊所說之經)凡八字、盡道體之奧、謂之天書。字方一丈、八角垂芒、光輝照耀、驚心眩目、雖諸天仙、不能省視」。

○天真 『莊子·雜編』漁父「禮者、世俗之所爲也。眞者、所以受於天也、自然不可易也。故聖人法天貴眞、不拘於俗。蔡邕『琴操』(文選卷十八李善注)「昔伏羲氏之作琴、所以修身理性、反天真也」。『太平經』卷六十八「夫天將生人、悉以眞道付之物具。故在師開之導之學之、則可使無不知也。不闔其門戶、雖受天真道、無一知也」。

○誠信 『禮記』祭統「是故賢者之祭也、致其誠信、與其忠敬」。『太平經』卷四十八「但流言相通、人人各欲至誠信、思稱天心、迺無一相欺者也」。

○深計 『戰國策』五國伐秦「秦嘗用此於楚矣、又嘗用此於韓矣。願王之深計之也」。『韓詩外傳』卷十「楚丘先生曰」吾則死矣、何暇老哉。將使我深計遠謀乎」。

〔原文〕

「一」者、其道要正當以守一始起也。守一不置、其人日明、〈天〉〈大〉〈一〉迷解矣。「明爲止」、「止」者足也。夫足者、爲行此道者、^(三)、但日有益昭昭^(三)、然不復愚闇冥冥也。「十一」^(四)、土也。「明爲止」者、赤也。言赤氣〈謂〉「得」^(五)此、當復更盛^(六)大明也。「止」者、萬物之足也。萬物始萌、直布根、以本足生也。行此道、其法乃更本元氣。得天地之心、第一最善。〈政〉〈故〉^(七)稱上皇之道也。

〔校勘〕

- (一) 天…經作「大」。從此改之。
- (二) 爲行此道者…經作「爲行生、行此道者」。
- (三) 日有益昭昭…經作「日益昭昭」。
- (四) 十一…經作「十一者」。
- (五) 謂…經作「得」。
- (六) 盛…經作「盛王」。
- (七) 政…經作「故」、從此改之。

〔訓讀〕

「一」とは、其の道要^{かなら}ず正に當に「一を守る」を以て始めて起すべきなり。一を守りて置かざれば、其の人日に明らかなり、大なる迷解せらる。「明を止と爲す」の「止」とは、足なり。夫れの足とは、此の道を爲し行う者、但だ日に益ます昭昭たる有るのみ、然るに復た愚闇冥冥ならざるなり。「十一」とは、土なり。「明を止と爲す」とは、赤なり。言うところは赤氣此を得れば、當に復た更らに大明を盛んとすべきなり、と。「止」とは、萬物の足なり。萬物始め萌うれば、直ちに根を布き、以て足生ずるに本づくなり。此の道を行ふこと、其の法は乃ち更に元氣に本づく。天地の心を得る、第一の最善なり。故に上皇の道と稱するなり。

〔譯〕

「一」とは、その道はかならず「一を守ること」を始まりとすべきであることをいう。守一して置き去りにしなければ、その人は日に日に明知をえて、大いなる迷いから解放される。「明を止と爲す」の「止」とは足のことである。足というのは、この道を踏み行ふものだけが、日に益ます明らかとなり、ふたたび暗愚にもどらないことをいう。「十一」とは、「土」のことである。つまり「十一に）明を止と爲す」とは、「赤」の字のことである。（天書の文字をなりたたせている）赤氣、これを得れば、大きな明知をさらに旺盛にすることができ。 「止」とは、萬物の足、つまり根本である。萬物が始めて萌えたと、すぐに根をはり、その足が出てくることにもとづく。この道を行ふ、その方法は（根元である）元氣に本づくものであり、それこそ天地の心を體得する第一の最善の方法である。だから「上皇（最上に耀く上古）の道」と稱する。

○守一 『老子』第五章「多言數窮、不如守中」。第三十七章「道常無爲而無不爲、侯王若能守之、

萬物將自化」。第二十二章「是以聖人抱一爲天下式」。『太平經鈔』卷二「守一明之法，長壽之根也。萬神可祖，出光明之門。守一精明之時，若火始生時，急守之勿失。始正赤，終正白，久久正青」。『太平經』卷三十七·五事解承負法「以何爲初。以思守一、何也。一者、數之始也。一者、生之道也。一者、元氣所起也。一者、天之綱紀也。故使守思一」。

○始起 『春秋左氏傳』僖公傳二十五年「晉於是始起南陽」。

○不置 『晏子春秋』「晏子曰、嬰聞之、爲者常成、行者常至。嬰非有異于人也。常爲而不置、常行而不休者、故難及也」。『太平經』卷十「故心神動搖、使形不安。存之不置、利其可安即留矣」。卷九十八「故後世讀吾文書、從上到下、盡睹其要意義而行者、萬不失一也。守之不置、自然畢也」。

○大迷 『老子』第二十七章「不善人者、善人之資。不貴其師、不愛其資、雖智大迷」。『太平經』卷四十九「入浮華、凡人大迷惑窮困矣」。※『太平經』卷三十九「守一不置、其人日明乎、大迷惑矣」。

○赤氣 『易通卦驗』（藝文類聚卷三）「離、南方也。主夏、日中赤氣出」。『太平經』卷一百一十三「南方徵之音……赤氣悉喜、赤神來遊、心爲其無病」。卷一百一十九「夫太陽上赤氣至、乃火之王精也」。※『靈寶赤書五篇真文』（無上秘要卷二十四）「元始洞玄靈寶赤書五篇真文、生於元始之先、空洞之中、天地未根。……元始鍊於洞陽之館、治於流火之庭、鮮其正文、瑩發光芒、洞陽氣赤、故號赤書」。

○更盛大明 『周易』乾（十下）「彖曰、大哉乾元、萬物資始、乃統天、雲行雨施、品物流形。大明終始、六位時成」。

○本元氣 『春秋公羊傳』隱公元年「元年」何休注「元者、氣也。無形以起、有形以分、造起天地。天地之始也」。『太平經』卷四十九「夫古者、本元氣天生之時、人盡樂學欲仙」。卷九十三「夫天名陰陽男女者、本元氣之所始起、陰陽之門戶也。人所受命生處、是其本也」。

○昭昭 『老子』「俗人昭昭、我獨昏昏」。

○冥冥 『毛詩』小雅·無將大車「無將大車、維塵冥冥」。朱熹集傳「冥冥、昏晦也」。

○始萌 『史記』封禪書「歲始或冬至日、產氣始萌」。『帝王世紀』（太平御覽卷二）「元氣始萌、謂之太初」。

○天地之心 『周易』復（六五上）「復其見天地之心乎」。王弼注「復者、反本之謂也。天地以本爲心者也」。『禮記』禮運（四三四下）「故人者、天地之心也、五行之端也」。孔穎達疏「天地高遠在上、臨下四方、人居其中央、動靜應天地。天地有人、如人腹內有心、動靜應人也。故云天地之心也」。『太平經』卷三十九「能日習言吾書者、即得天正經字也。令得其至意、迺與天心合、使萬物各得其所、而不復亂、故言萬物理也」。

○上皇 『莊子』天運「天有六極五常、帝王順之則治、逆之則凶。九洛之事、治成德備、監照下土、天下戴之、此謂上皇」。鄭玄「詩譜序」（『毛詩』卷一四上）「詩之興也、諒不於上皇之世」。孔穎達疏「上皇、謂伏羲、三皇之最先者」。『太平經』卷四十九「故古者上皇之時、人皆學清靜、深知天地之至情、故悉學眞道、乃後得天心地意、人不力學德、名爲無德之人」。

※『太平經合校』太平經卷三十九·解師策書訣第五十

真人稽首再拜、「唯唯、請問一疑事解。」「平言何等也？」「天師前所與愚昧不達之生策書凡九十字。謹歸思於幽室、閒處連日時、質性頑頓、晝夜念之、不敢懈怠、精極心竭、周遍不得其意。今唯天師幸哀不達之生、願爲其具解說之、使可萬萬世貫結而不忘。」「善哉、子之難問乎、可謂天人也。諾。真人詳聆聽、爲子悉解其要意。」

師曰：「吾字十一明爲止。師者、正謂皇天神人師也。曰者、辭也。吾迺上辭於天、親見遣、而下爲帝王萬民具陳、解億萬世諸承負之謫也。

吾者、我也。我者、即天所急使神人也、今天以是承負之災四流、始有本根、後治者悉皆隨之失其政、無從得中斷止之、更相賊傷、爲害甚深、今天以爲重憂。

字者、言吾今陳列天書累積之字也。

十者、書與天真誠信洞相應、十不誤、無一欺者也。得而衆賢、各自深計、其先人皆有承負也。誦之不止、承負之厄小大、悉且已除矣。

一者、其道要正當以守一始起也。守一不置、其人日明乎、大迷解矣。

明爲止、止者、足也。夫足者爲行生、行此道者、但有日益昭昭、不復愚暗冥冥也。

十一者、士也。明爲止者、赤也。言赤氣得此、當復更盛王大明也。止者、萬物之足也。萬物始萌、直布根以本足生也。行此道、其法迺更本元氣、得天地心、第一最善、故稱上皇之道也。

丙午丁巳爲祖始。丙午丁巳、火也、赤也。丙午者、純陽也、丁巳者、純陰也。陰陽主和、凡事言陰陽氣、當復和合天下而興之也。爲者、爲利帝王、除凶害出也。祖者、先也、象三皇德也。始者、反本初也、故行是道、當得反上皇也。

四口治事萬物理。四而得口者、言也、能日習言吾書者、即得天正經字也。令得其至意、迺上與天心合、使萬物各得其所、而不復亂、故言萬物理也。

子巾用角治其右者。誦字也、言誦讀此書而不止、凡事悉且一旦而正、上得天意、歡然而常喜、無復留倍也。

潛龍勿用欲爲紀。潛龍者、天氣還復初九、甲子歲也、冬至之日也、天地正始起於是也。龍者、迺東方少陽、木之精神也。故天道因木而出、以興火行。夫物將盛者、必當開通其門戶也。真人到期月滿、出此書宜投之開明之地。開者、闢也、通也、達也、開其南、更調暢陽氣、消去其承負之厄會也。潛者、藏也、道已往到、反隱藏也。勿者、敢也、未也、先見文者、未知行也。用者、治也、事也、今天當用此書除災害也。玄甲歲出之、其時君未能深原書意、得能用之也。故言勿用者、見天文未敢專信而即效案用之也。信用之者、事立效見響應、是其明證也、迺與天合、故響應也。欲爲紀者、子稱欲、甲、天也、綱也、陽也。欲者、子也、水也、陰也、紀也。故天與地常合、其綱紀於玄甲子初出、此可爲有德上君治綱紀也、故言欲爲紀也。迺謂上皇天書、下爲德君出真經、書以繩斷邪、以玄甲爲微初也。凡物生者、皆以甲爲首、子爲本、故以上甲子序出之也。

人得見之壽長久。人者、正謂帝王一人也、上德易覺知行道書之人也、據瑞應文、不疑天道也、深得其意則壽矣。壽者、竟其天年也。長者、得無窮也。久者、久存也。

居天地間活而已。居者、處也。處天地間活而已者、當學真道也、浮華之文不能久活人也。諸承負之厄會、咎皆在無實核之道故也、今天斷去之也。

治百萬人仙可待。治者、正也。天以此書正衆賢之心、各自治病、守真去邪。仙可待者、言天下聞之、真道翕然悉出、往輔佐有德之君。治真道者、活人法也、故言仙可待也。

善治病者勿欺殆…凡人悉愚、不爲身計、皆以邪僞之文、無故自欺殆、冤哉！反得天重謫、而生承負之大責、故天使其棄浮華文、各守真實、保其一旦夕力行之、令人人各有益其身、無肯復自欺殆者也。

樂乎長安市…樂者、莫樂於天上皇太平氣至也。乎者、嗟嘆其德大優無雙也。長者、行此道者、其德善長無窮已也。安者、不復危亡也。得行此道者、承負天地之謫悉去、迺長安曠曠恢恢、無復憂也。市者、天下所以共致聚人處也。行此書者、言國民大興云云、比若都市中人也。

使人壽若西王母…使人者、使帝王有天德好行正文之人也。若者、順也、能大順行吾書、即天道也。得之者大吉、無有咎也。西者、人人棲存真道於胸心也。王者、謂帝王得案行天道者大興而王也、其治善、迺無上也。母者、老壽之證也、神之長也。

比若四時周反始…比者、比也。比若四時傳相生·傳相成、不復相賊傷也、其治無有刑也。

九十字策傳方士…九者、究也、竟也、得行此者、德迺究洽天地陰陽萬物之心也。十者、十十相應、無爲文也。字者、言天文上下字、周流遍道足也。傳者、信也、故爲作委字符信以傳之也。方者、大方正也、持此道急往付歸有道德之君、可以消去承負之凶、其治即方且大正也。士者、有可剋志一介之人也。

一介之人者、端心可教化屬事、使往通此道也。吾策之說將可觀矣。